

修士論文（要旨）

2013年1月

成人障害者をもつ保護者の心的負担に関する研究

指導 茂木 俊彦 教授

心理学研究科

健康心理学専攻

211J4057

成田 和子

目次

はじめに	1
第1章 障害のある子どもを育てる保護者のストレスに関する先行研究	3
1.1 問題の背景——障害者とその家族を取り巻く現状	3
1.2 障害をもつ子を育てる保護者や家族のストレス	3
1.3 障害児・者を育てる保護者のストレス要因——環境・個人要因	4
1.4 障害児・者を育てる保護者のストレス緩衝要因——柔軟性と対処行動	4
1.5 障害児・者を育てる保護者のストレス測定方法	5
1.6 障害児・者を育てる保護者の心理とサポート	6
1.7 まとめ	6
第2章 本研究の目的と研究の流れ	8
2.1 本研究の目的	8
2.2 調査の構成	8
2.3 質的調査の目的と調査方法	8
第3章 成人障害者を子にもつ親のストレス構造について——QRS-SF 日本語版の因子分析による検討——	10
3.1 目的	10
3.2 方法	10
3.3 分析方法・因子分析	10
3.4 結果	10
3.5 尺度の分析	11
3.6 尺度の特徴	14
3.7 考察	16
第4章 成人障害者を子にもつ親のストレス構造について——自由記述のテキスト・マイニング分析——	18
4.1 自由記述「問 1」「問 2」	18
4.2 質的調査データとテキスト・マイニング	18
4.3 評価分析	30
4.4 考察	31
第5章 成人障害者を子にもつ親のストレス構造について質的調査からの検討——インタビューを KJ 法で分析——	33
5.1 調査方法と分析について	33
5.2 インタビュー・半構造化面接	33
5.3 インタビュー分析の結果（全体図）	36
第6章 総合考察	51
終わりに	53
参考文献	i
資料	①

はじめに

障害のある子どもを支える存在として、保護者は最も重要な存在なのである。この保護者がいつまでも心身が健全で、長生きできる生活が支えられ、見守られるかによって、障害者は健全な生活を守ることができると考えられる。

筆者は元教師の立場からこの問題を取り上げ、保護者の不安を少しでも緩やかなものとなる支えづくりをしたいと願い、現状の把握を行う調査を行うことにした。

1 障害のある子どもを育てる保護者のストレスに関する先行研究

問題の背景——障害者とその家族を取り巻く現状

障害者の寿命は、かつては短命であったが近年の医療技術や保健衛生の向上、食生活の改善などにより、平均寿命が著しく延びた。

まとめ 海外でも、こうした家族の人の中には、長生きする中で適応性を改善していく者もあり、それまで家族にとって「重荷」であったことから、むしろ家族にとって「大事な資源」となっているという指摘をしている。

2. 本研究の目的と方法

目的 保護者の高齢化からくる問題の現状把握と不安への支えづくり

研究1 ①「Holroyd、Questionnaire on Resources and Stress (QRS)のQRS-SF

日本語版を使用した調査用紙(アンケート)——統計分析

② 設問2問の自由記述————テキスト・マイニング分析

研究2 成人障害者をもつ保護者へのインタビュー 質的分析「KJ法」

場所：M市障害者通所施設4か所

期間：2012年7月～10月

対象者の属性 配布217名(回収数139名、回収率64%)

有効回答者 118名 (平均年齢59.59歳、母親101名、父親6名、
父母以外5名、性別無回答6名)

3. テキスト・マイニング 評価分析

記述したテキストの中から、保護者が良いイメージ(ポジティブ)または悪いイメージ(ネガティブ)を持っているかを調べた。これによると、ネガティブな見解は、子どもとの生活に関するイメージを持っていることが伺えた。だが、意外とネガティブなイメージが少ないのは、障害者福祉手当、保護者の経済的な余裕、家族との和合、子どもの作業所やグループホームでの生活などによって、当面大きな不安やストレスを持っていないように見受けられる。

4. インタビュー分析の結果 (全体図) 参照

子どもが誕生してからのこと、今現在のこと、また、これから先のこと、これらの時代を3区分に分ける内容ができた。悩みや考えが述べられているという時間軸があり、この時間軸に沿って、それぞれの項目の内容が話された。例えば、子どもの障害を知った後の悩みということの話があり、それぞれの時間軸に沿って、不安を乗り越えていき、今現在の生活を過ごしながら、子どもである成人障害者へ向けてやるべきことは何かを模索している考え、現在を踏ま

えて障害のある子どもの将来を考えるさまざまな理想像を思い描いているようすを窺い知る事が出来た。

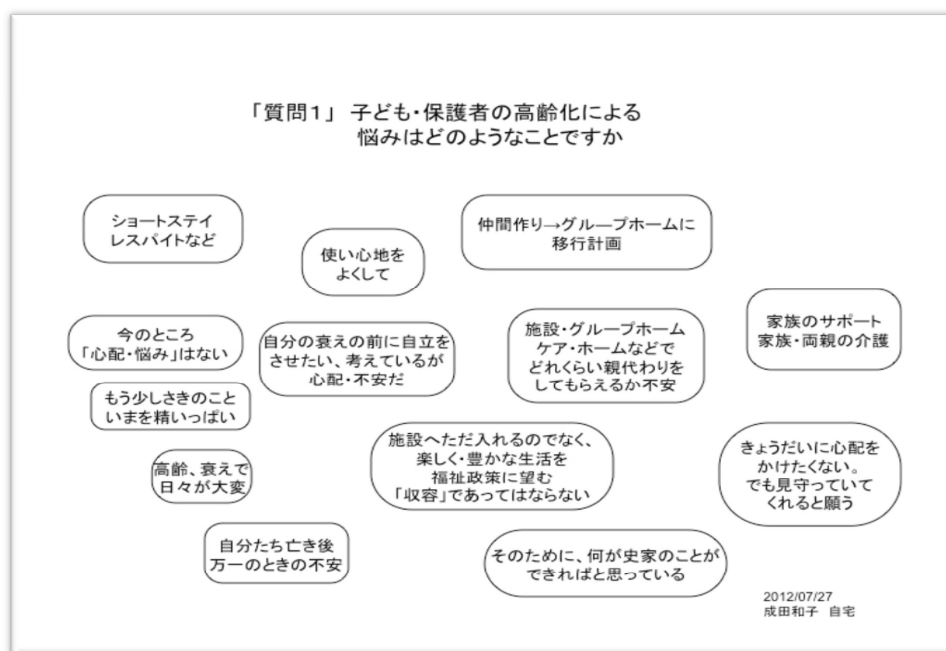
この考えに至るまでに子育ての経過から、やはりそれぞれの時間軸の上に支援をしてくれる人々、家族の人々の影響が大きかったことが保護者から多く語られた。

この、障害児を育ててきた過程を振り返ることで抽出された障害のある子どもの子育てに伴うカテゴリーは、全5ブロックから構成された。

I、障害を知ったきっかけ、II、子どもの教育・活動の場、III、支援者、IV、保護者の想い、願い、V、終の棲家 の各ブロック内で、子どもや保護者の今ここにある状態の意味づけとして、時系列的にカテゴリーが抽出された。それぞれのカテゴリーを通して、保護者の役割が実際の子育てに自ら従事する実践的な「世話する」役割から、子が成人するにつれて「見守る」、「整える」役割へと変化していた。それにしたがって、活動の場所の変遷、訓練の内容の変遷、それらに関わる人々、子の発達段階に伴った新たな問題が生じ、それらに対して保護者の子を思う感情が表れていた。

これらの経過を経て、最終的には現時点での最良な形、理想の終の棲家の構想が現実化しつつあるといった概念図が構築された。

4.2 : インタビュー : 半構造化面接



保護者の心的変化は、健常な子どもであれば急行電車で走るようなもので、障害の子どもは各駅停車で走るようで、さまざまなことをゆっくり考えながら日々の生活を経過してきたという感じをもっている。その中で保護者は自分以外に周りの世界を見渡せる感情や情感を養い、気がつけば自分が落ち着きのある気持をもつようになったようである。長い苦労のかけで徐々に育まれていったようすを感じとることができた。

保護者の成長に伴い、子どもが小さいときに行ってきた「世話をする」ことからだんだんと保護者は同じ世話でも「環境の整備をする」という、質の変換があっていると考える。

総合考察

国連の障害者権利条約をはじめとし、わが国における法的な整備も整えられ、障害者の生活はよき方向へと向かっている。

障害のあるすべての子どもは、学齢期には教育機関で過ごし、必要な心身の発達をとげてきた。

そうした障害者も成人となった現在、本人自身や家族の責任で生きていく手立てを考えなければならない状況となっている。多くの人々は就業や作業所という環境へ移行しているが、移行したい場所までの手続きは学校関係者が行い、その後は家族に任せられているのが現状である。

このような保護者はどのような苦勞、不安、悩みなどがあるのだろうか、ということから今回、保護者の負担についての調査を行った理由である。

統計的調査「Holroyd、Questionnaire on Resources and Stress (QRS)のQRS-SF日本語版を使用した調査では、原版尺度は児童を対象にしているものであり、今回、これを修正し使用した。この尺度のまとまりをみたが本調査だけでは十分とは言えなかった。新たに成人用の尺度が必要という結果からの反省である。

質的調査では、ビジュアル化した分析としてテキストマイニングを使用した。年代別に不安なようすを語る用語が増える傾向を捉えている。

今回のインタビューでは保護者が障害のある子どもを育てるにあたり、子どものころに感じたストレスや負担感と、現在成人してからの子どもとではストレスや負担感にどのような違いがあるのか、ということについて、調査をした結果が図解により以下に示される内容となった。

心的負担について、5つのカテゴリーが抽出され、そこから「子どものころ、現在、将来」の時間軸が出来た。また、この中のⅣ「保護者の思い・願い」では、子どものころと成人してからの大きな相違点は性差に関することであった。Ⅰ～Ⅲの「障害に気づいたきっかけ」「子どもの教育・活動・生活の場」「支援者」の中にも子どもの頃と成人になってからは、活動の場が移行していることから、それに伴う人々との関係も異なっている。保護者の子どもに対するサポートの内容は病や体調を含め、成人として自立に向けていくという変化している。

子どもが成人したことに伴い、保護者の高齢化も進んでいるなどから、母の思いは、子どもの将来を見据え、保護者、(特に母親)の愛情を込めた願いとして「終の棲家」を福祉政策と共に実現できるプランを考えたいということに至っている過程と言える。

インタビューのKJ法による図解作成の分析は、現在のM市における保護者の考えている不安・負担のモデル像ができた。

これらの結果から、今後保護者への心的負担をどのようにサポートしていくのかということについては、支援の中でいずれの保護者からも発言があった「親の会」のような身近な支援が最も重要な役割を果たしている事が判明した。同じ障害でなくても、心の通う話は参考になり、がんばろうという気持を奮い立たせることができる。語りあうことができるような場所、機会が必要なのだということが判明した。

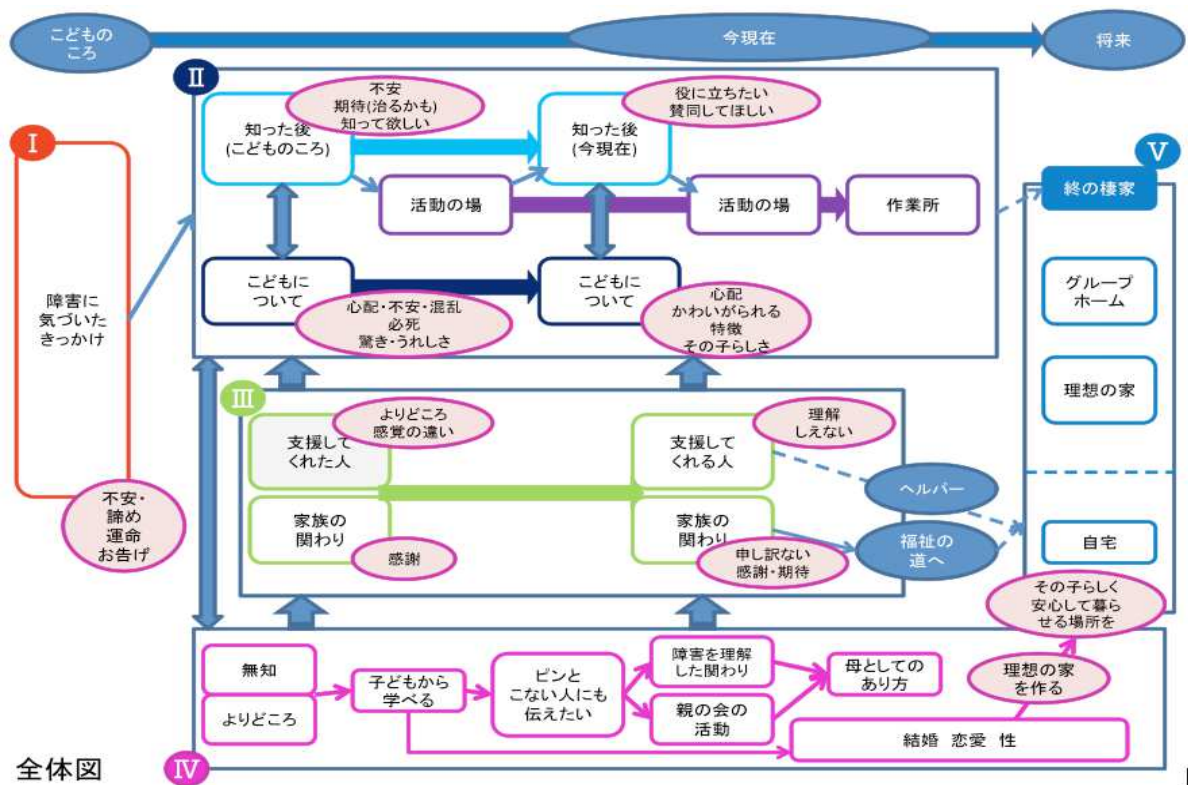
他方で、親の会で現在活動しているメンバーより若い保護者がなかなか加わることが少ないという会もあり、課題となっていることも明らかになった。

それでも、自分達の「親の会」の経験を考えると主催者側では、それぞれが気軽に参加できる工夫を考え、多くの参加者へ呼びかけることも考えられていた。今後に期待できそうである。

また、移行期のそれぞれで障害のある本人の事について何度も同じ事を尋ねられた経験のある保護者、また、移行期や災害時に障害者の事を知る人が不意のことで伝えられないような時に、その障害者について本人を理解できる生活史の作成をし、備える活動を行う計画を考え、実行へ向けて活動をはじめている。

このことは、障害のある人々の一生涯を通してサポートできる記録を本人にも分かりやすく、思い出になるようなサポートブックとして作成し、これを推進していこうとしているものである。

最後に、障害者への福祉政策は時代と共に充実してはいるが、保護者への支援に関する制度上の不十分さはまだ残されている。地域の諸資源に関する情報の不足は、保護者が将来への不安を増長させる一因であることが本調査からも、また、先行研究からも示唆された(紫藤・松田, 2010)。保護者の許に正しく情報を伝える経路を構築すること、情報を必要とする者が情報にアクセスできる環境を整えること、が保護者の心的負担の対処にも役立つことが判明したと考える。



参考文献

- 井川淳史、「知的障害者の高齢化に伴う生活の変容と課題—知的障害者の生活実態における史的検討を通して」 桜花学園大学人文学部、研究紀要、13、1-14、2011.
- 石川利江 井上都之 岸太一 西垣内磨留美 「在宅介護者の介護状況、ソーシャルサポートおよび介護バーンアウト—用介護高齢者との続柄に基づく比較検討—」 健康心理学研究、16 (1)、43-53、2003.
- 稲浪正充・小椋たみ子・西 信高・大西俊江・高山草二「4QR S簡易型の検討—われわれの簡易型とQRS-SF, QRS-F, QRS-SFAの比較」 島根大学教育学部紀要、22(1)、61-71、1988.
- 植村勝彦・新美明夫 「心身障害幼児をもつ母親のストレスについて—ストレスの構造」 特殊教育学研究、18、59-69、1981.
- 川喜田二郎、『パーティー学』 社会思想社、1964.
- 北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男 「障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響」 特殊教育学研究、33、35-42、1995.
- 紫藤恵美・松田 修 「知的障害児の母親の将来不安に関する研究」、東京学芸大学紀要、総合教育科学系 I、61、205-212、2010.
- チャールズ・ハート、高見安規子訳『見えない病—自閉症者と家族の記録』 晶文社、1992.
- 中野孝子 「家族ストレスに関する基礎的研究—心身障害児をもつ親のストレス—」 関西学院大学文学部教育学科紀要、教育学科研究年報、19、69-84、1993.
- 中塚善次郎(1984). 障害児をもつ母親のストレスの構造 和歌山大学教育学部紀要、33、27-40.
- 新美明夫・植村勝彦 「心身障害幼児をもつ母親のストレスについて—ストレス尺度の構成」 特殊教育学研究、18、18-33、1980.
- 長谷川俊雄 『親の高齢期及び親亡き後の生活維持のための相談支援と社会制度 ひきこもり支援者読本』 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室編集、2011.
- 久野典子・山口桂子・森田チエ子 「在宅で重症心身障害児を養育する母親の養育負担感とそれに影響を与える要因」 日本看護研究学会雑誌、29(5)、59-69、2006.
- 藤原里佐「障害者家族における母親役割の変化—加齢期にある母親の生活を中心に」 教育福祉研究、第9号、127-135、2003.
- 前盛ひとみ・岡本祐子「重症心身障害児の母親の心理的問題と心理臨床学的援助に関する研究の動向と展望」 広島大学大学院教育学研究科紀要、第三部、189-198、2007.
- 真木典子「在宅重度重複障害児・者の母親の心理とサポートのニーズに関する一研究」 九州大学心理学研究、5、263-272、2004.
- 三木安正「親の理解について」 精神薄弱研究、1(1)、4-7、1956.
- 茂木俊彦編 『障害児を育てる』 国民文庫 大月書店、1984.
- Bayat, M. "Evidence of resilience in families of children with autism." *Journal of Intellectual Disability Research*, Vol. 51, Part 9, 702-714. 2007.